令和元年度
ブラジル通信
けんぱくしけんぶんろく
遣伯使見聞録
No. 17
20191021
学校教育課
夏目　裕介

Era uma vez･･･　（昔々、あるところに…）

クリチバやマリンガ、パラナバイで聞いたことや感じたことをまとめてトピック的に紹介（その５）します。

【トピック話】その５

⑤昔話の話

日本から二冊の昔話の本を持ってきました。一つは教育委員会の倉庫で見つけた「LENDAS DO JAPÃO」（日本伝説：日本の昔話をポルトガル語に訳したもの）、一つは「ブラジルのむかしばなし１・２・３」（東京子ども図書館）です。「LENDAS DO JAPÃO」はパラナバイ市の各小学校に「子どもたちに読み聞かせしてあげてください」と言って一冊ずつ配りました。

「月」と「娘」という点で共通する話がありました。「かぐやひめ」と「アマゾンのハス」です。「かぐやひめ」はご存じ、光り輝く竹から見つけたきれいな娘がたくさんの貴公子たちの結婚の申し込みを断り、月へ帰ってしまうというお話です。「アマゾンのハス」はこんなお話です。

アマゾンのハス

《前略》

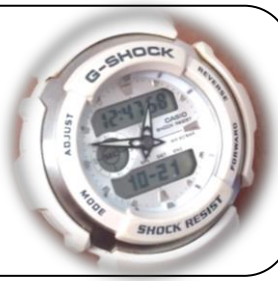
「あの星のひとつひとつは、みな月と結婚したインジオの娘なのじゃ。月は美しい騎士で、月夜の晩には、インジオの娘と結婚するために地上に降りてくるのじゃ。あそこに見えるのがナカイラと言ってマウェー族で一番美しい娘。こっちの星は、アウアケス族の娘で花のように優雅なジュアンという娘だった・・・。」と老酋長（ろうしゅうちょう）は言いました。そして、

「むかし、われらが部族に、ナイアという美しい娘がいた。ナイアは、月が美しくたくましい騎士だと知って、たちまち心をうばわれてしまった。そして、部族の若者たちからの結婚の申し込みをつぎつぎに断り続けた。やがて、ナイアは、毎晩森へ出かけて、銀の光に輝く月をうっとりながめるようになった。また、ときには、森の中を走り回って月を抱きしめようとした。しかし、そんなナイアの必死な思いもむなしく、月はいつもただ遠くに冷たく光っているだけだった。

ある晩、ナイアは湖のほとりへやってきた。そして、水に映った月を見て、それが自分の愛する白い騎士だと思いこんでしまった。かわいそうにナイアは身をおどらせて湖のふち深く飛びこんでしまった。月を失いたくなかったからだ。こうして、あわれなナイアは死んだ。

それを見た月は、ナイアを空の星ではなく、水の中の星にしようと決めた。そして、ナイアをすばらしく大きな美しい花に変えたのじゃ。やがて、その花は毎晩、月に向かって大きな花びらを開くようになった。月がバラ色のわが胸を照らしてくれることを願って。その花がアマゾンに咲くオオオニバスじゃ。」

美しい娘が多くの男たちの結婚の申し込みを断り、月に帰ったり、月を求めて死んでしまったり…。竹とオオオニバスという植物についても共通しています。また一つ、日本とブラジルの共通点を見つけることができました。日本語とポルトガル語という言語こそ違いますが、昔の人は同じようなことを考えて、お話を作ったのだろうかと考えさせられました。

折り返し時点　　～ナッツコラム～

本日１０月２１日で、ナッツのブラジル見聞の旅も半分終わったね。もう？やっと？俺を左手首につけて時間を確認し「日本では今頃何が起こってるかな？」「あの人は何してるかな？」なんて考えてばっかり…。そう言えば、最近学校で子どもたちと関わるとき以外、全然笑っていないね。そうだよね、一人で笑っていたら怖いよね。あと半分、ゴールに向けていっしょにブラジル見聞しよう！　　（ナッツの腕時計より）